

Voice 声 100 年

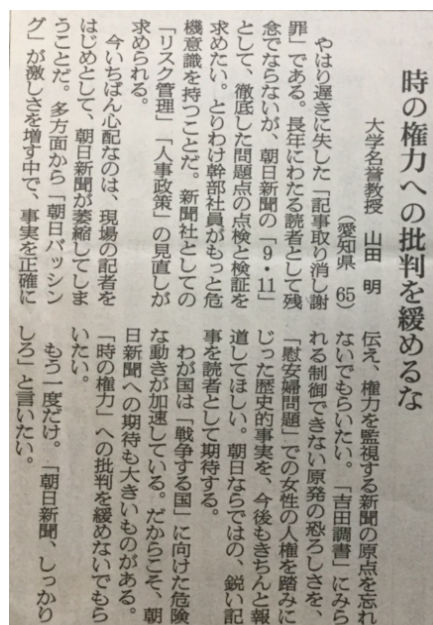
表題は朝日新聞 2 月 5 日の特集である。リードから一読者の投書欄「声」は 5 日、前身を含めて 100 周年を迎えました。この間、政治や社会への読者の思いを伝え続け、世相を映し出し、時に世の中を動かす力にもなりました。メディアが多様化する中、「声」に投稿する理由は何か。掲載された 3 人の思いを紹介するとともに、「声 100 年の歩み」をお届けします。



3 人の中で、精神科医・香山リカさんの思いの最後を紹介したい。—社会を分断して対立をあおるトランプ流の主張は熱狂的賛同者を生みやすい。それを少数派と侮って傍観しているうちに多数派になっている。そんな悪夢のようなことが彼の当選で現実になった。都知事選でヘイト論者が 11 万票もとったのも同じです。防ぐには、市民が傍観せず、批判の声を上げ続けなくては。その時頼れるのは、幅広い層に意見が届く新聞投稿です。だから「声」には今後も期待しています。ただ、意見のバランスにとらわれすぎないでほしい。沖縄の基地問題で政府と住民が対立している時、両論を公平に載せたら、結局は権力と発信力を持つ政府に有利です。偏っていると批判されても、新聞は権力を持たない市民の声に重きをおいていただきたい。私もまた、一読者として投稿させていただくつもりです。

じつは本特集にあわせて、私も「声」に投稿した。これまで、どれだけ投稿してきたか数えていないが、数十回はあるだろう。掲載されたのは数えるほどだが、2014 年 2 月の「最終講義」の最後に、参加された人たちに新聞への投稿を呼びかけた。それから半年後に、例の「朝日新聞問題」がクローズアップされ、怒りをこめて投稿した。それが 9 月 14 日、幸運にも 4 本社版に掲載された。「声」について、こんな私の思いを投稿したが、今回は編集者に届かなかったようだ。

「声 100 年の歩み」で残念なのは、朝日の「2014 年問題」に触れていないことだ。朝日新聞のかつてない危機に対して、多くの読者からの声が届いたはずだが。あれから 2 年半、なんだか不安になってきた。



(2017 年 2 月 7 日)